



戸惑う患者から 賢い患者になるための道案内

⑥がんの告知から治療のはじまりへ

佐久大学看護学部教授 ^{てる み} 水野照美さん

今回は、がんと伝えられて治療を始めるまで、次回はがんの通院治療について述べます。

【がん和我们たち】

多くの方は、「がん」について、日頃は考えたくないものとしています。しかし、日本では、2人に1人はその生涯のうちにかかる身近な病気です。早めに見つけて対応することで、心身や生活への影響がなるべく少ない治療を受けられます。

【暮らしへの影響が長期になるため、一人で抱え続けられない】

がんを伝えられる場合は、普段の外来です。検査結果から病名・病状を伝えられ、次の手を決めます。その内容に圧倒され、説明が頭に入らなくてもふつうのことです。また、治療は長丁場であり、仕事や生活の調整が必要になります。

このため、一人で抱え続けず、どなたかに話すことを勧めます。言葉にすることで、気持ちの整理もできます。周りの方はあなたのことをきっと気にかけているため、「話してくれてよかったよ」となることがほとんどです。

【まっとうな情報に接して、今の私の状況を知る】

病状や治療について説明される内容は、量が多く複雑に感じられます。面倒になると、「〇〇はする

な」「□□を飲め」等の単純な言説に心が動きますが、慎重にしましょう。お勧めの情報は、「もしも、がんと言われたら」「がんになったら手にとるガイド」等の国立がんセンター作成の小冊子で、ネットで閲覧できます。

現在の主治医の説明に加えて、別の医師の考えを知りたい場合、納得して治療を選ぶため「セカンドオピニオン」を得ることもできます。現在の主治医に「セカンドオピニオンを受けたいのですが」と相談してください。言いづらいかもしれませんが、大事な自分の身体のことについて、納得して前向きに治療を受けたい旨をお伝えください。今は通常のことになりつつあります。

方法は、まず、現在の主治医に紹介状と検査結果の準備をしてもらいます。次に、第二の受診先に予約を入れます。そこで相談した結果を、元の主治医に戻って報告し、治療の方針を決めることになります。手間と費用と時間がかかるので、緊急対応が必要な場合には向きません。

【とりあえず次の動きを「やる」と決める】

インフォームドコンセントとは、説明を受けて納得して選択することを示す大切な考え方ですが、本人には難儀なことです。それでも「これをやる」と自分で決めることで、前に進む力が湧きます。

早めに対応することで命が長らえ、その間にかん医療は進歩して、治療の選択肢が増えます。期待と勇気をもって現在の最善策に取り組みましょう。困ったら、まず外来の看護師への相談をお勧めします。一緒に考え、頑張っていきましょう。